

もたいのうみ
獲ノ海を尋ねて

光ねんびく
千年比丘尼物語

朧体は堅い鱗でおおわれ、顔は人間の赤子のようでした。あまり珍しいので近所の人を呼んでぞ馳走をしました。が、一同は氣味悪がつて誰ひとり箸をつける者はいませんでした。

「お土産にどうぞ」と包んで差し出された時には、一同はただ顔を見合わせるばかりでした。

帰る途中不氣味な話次々と出て、皆な土産の魚を海に捨ててしまいました。その中の一人はかなり酔いつぶれていたのか、捨てるは魚の魚を袂に入れたまゝわが家に持ち帰りました。この者に一人の娘がいて、その包の魚を食べてしまいました。

その娘は年頃になり、婿をもらい子を産みま

した。それから数十年経ち婿は死に、また、その子も腰が曲つて白髪となり火の消えたように死にました。

そして長い年月が経ちましたが、人魚を食べた娘は老いもせねば死にもせず、龜山の東の坊山ぼくという小山に庵を結び、年知らずの黒髪を剃り落として比丘尼になり、一人さびしく暮らしておりました。

余りにも長く生きすぎたこの女人には、身内もなく友達もなくその歳さえ知るものもありませんでした。

なぜかこの人は庭に椿の木を植えて大切に育てていました。そして、いつのころからか坊山の庵を後にして占見うらみの津熊つぐまの森に居を移しましたが、そこからまた諸国行脚の旅に出て、ついに帰ることはありませんでした。

比丘尼の植えた坊山の椿の木の下には、朱しゆ囊がめ七なな囊かめ七なな通とおう、黄金こがね七なな囊かめ七なな通とおうを埋めてあると伝えられ、ここでは大晦日の夜金の鶏が鳴くといわ

れていました。

また、占見を出発するとき、見送りの衆に、「この杖がつくまには戻ってきますぞ」といったので、その「つくま」が地名になったとも伝えられています。

そして比丘尼のさした杖からは芽が出て、やがては天にもとどき地をうるおさぬほどの大樹になったということです。

それからまた数百年もの時が流れ、甕ノ海は干拓されて龜山も占見もすっかり陸地に変わったところに、一人の龜山の村人が若狭国の小浜というところに旅したことがありました。

そして、その庵ではからずも年老いた一仙尼に出会いました。

その仙尼は「私の郷里は備中であります。私の幼い時、龜山の海上で人魚を釣ったことがあります。今ではあのおたうはどうなっていますか」と尋ねました。

村人はこの人が昔から語り伝えられている千
年比丘尼なのかとたいへん驚きました。が、「龜

山のおたうはすっかり陸になって、海もなければ船も着きません」と答えますと、比丘尼は世の変転をはかなんだのか、ひとしお淋しそうな様子でしたが、それから間もなく若狭で亡くなったと伝えられています。

甕ノ泊と

龜山焼

陶焼の

流れを継ぐ龜山焼

古代では水や酒或は穀物等を入れて運搬や貯蔵に使用されたという大がめ（甕）は生活の必需品であり、鎌倉時代から室町時代前半にかけての約二百年間、龜山付近一帯で須恵焼物として大量に生産されていたと伝えられている。

もともと五世紀中頃の雄略天皇の時、朝鮮半島から渡来した人々によって、新技術のもとで硬質の土器や瓦などがさかんに作られるようになり、八世紀の奈良時代には陶地区で盛んに作られて、甕山の湊から積み出されていたという。九世紀以降の平安時代には、土と薪を求めて

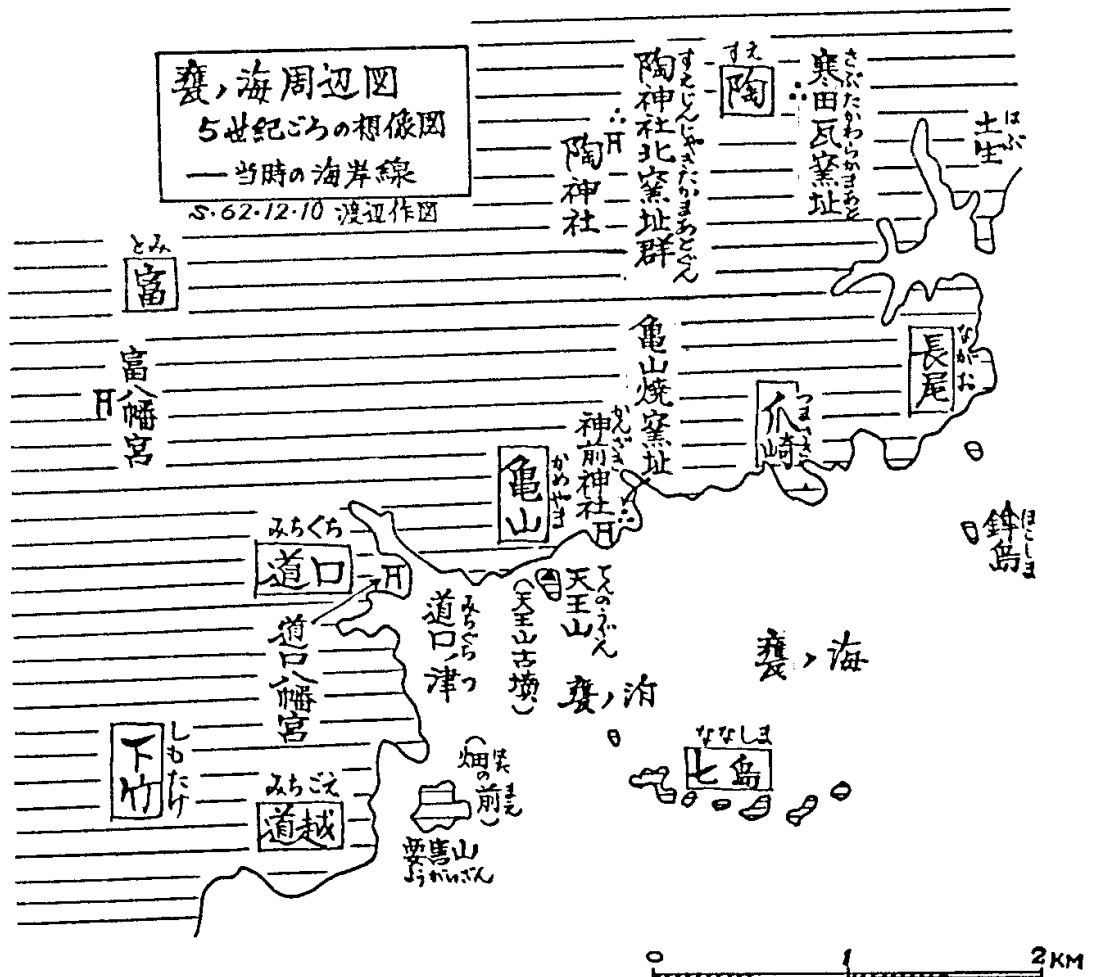
龜山の地に移って陶器作りの伝統を引き継ぎながら、大がめ・壺・鉢・鉢・土鍋などの日常生活用品を製作して、瀬戸内沿岸の各地へ送り出していたという。

そしてこの焼物がいつしか「龜山焼」と呼ばれるようになり、平安時代末から鎌倉時代（十三世紀中頃～十四世紀中頃）にかけて生産の最盛期を迎え、その後室町時代中頃（十五世紀中頃）には姿を消したといわれる。

龜山焼の窯址群は神前神社の境内及びその後方畑地の地表下に今でも残っており、またその周辺一帯では「かめ」の破片がおびただしく散乱累積していると伝えられている。

「かめ」の産地としての「養山」から転じて「龜山」となったという。

また、この龜山から道口へかけての入江をいつしか「養ノ泊」と呼ぶようになり、物資輸送の船が多数出入りし、隆盛をまわめ世にその名を知られていたということである。



太古の海岸線……あこまで想像でしかない。現在の山々の麓が海岸線であつたらうと推定している。また伝承によれば、ある時期には「富」の奥深くまで海が入りこんでいたとも伝えられているが……（三十三ページ参照）

『記録にみえる夔ノ泊』 さて「夔ノ泊」についてはいくわしい資料に乏しいが、少なくとも四〇五世紀ごろから江戸時代初期の十七世紀中ごろにかけての千三百年以上もの間、今の道越みちごえ畑はたの前まえ付つけ近ちかから道みち口ぐち・亀山かめやま・糸崎いとさきにかけての山麓が当時の海岸線であつたと考えられ、「夔ノ泊」とはこの湾曲した海岸線一帯とその沖合が潮待ち風待ちや夔かめの積出し等の天然の港としての機能を果していたと想像でき、古い歌集の中にも幾つかの歌に詠まれている。

○はこび積む夔ノ泊舟出して 漕げどつき
せぬ貢物かな (藤原家隆 永承三年)

一〇四八(大嘗会)

○貢物はこぶ千舟もこぎ出よ もたひの泊
しほもかないぬ (資實御 建久九年)

二九八(万代集)

○ころ舟によふ人ありと聞きつるは 夔に
泊るけにやあるらん (大宰大貳高遠

延慶三年) 一三一(夫木抄)

平安時代中期の十一世紀ごろ以降には海上交通の寄航要地として繁栄していたと考えられる。また時代がずつと下つて、江戸時代の初め元和元年(一六一五)岡田藩主伊東長實は大阪より海路を船によつてこの港に上陸し、陶・箭田を經由して下道郡岡田村の任地へ向つた、という記録も残つている。

さらに、亀山の西にある「道口みちぐち」も古くから交通の中継地点として重要な役割りを果していた。古い記録にも「道口みちぐち、津つ」という名称もみられ、山陽道の「道の口」がまつて「道口」となつたものと想像している。

今でも玉島変電所脇の道口川土手に沿つて、三本松・県立玉島寮・富田小学校・玉島北農校本所と北上して谷をさかのぼり、富峠とみとうげへ今は富トンネルとなるを越えて矢掛町横谷に出て、そこから三谷橋又は中村橋で「川辺・箭田・矢掛」と小田川に沿つて東西に走る「旧山陽道」と出会うことができる。

鎌倉時代蒙古襲来の頃（十三世紀末）の人、
京都智恩院の僧寂蓮が道口、津に宿泊した時の
詩に当時の道口の様子がいかがえる。

本朝無頭詩巻七 寂蓮禪師筑紫より上り
たる時 宿道口津賦所見

山重江複客遊淹 景趣蕭疎不耐胆

油幌晴望当鳥路 沙村秋夏富魚塩

月隨歸棹千程遠 煙起行厨一穗織

身与浮雲無定所 自哀自咲淚相霑

『山々が重なり合い、谷は様々に入りこんだこの道口の港
に来て泊る。 村の眺めは豪もまばら々大々淋しい
極みだが、 朝日のさす山の頂から海辺まで、一直線
に視界が開ける。 砂浜の村では四季をこまごま
海の幸に恵まれて、豊かである。』

月影の中を海路はるばる旅して来た舟は、それ
それに夕げの煙を細々と立ちのぼらせ、長途の
疲れをいやす。 それにひまかえて、あが身
は空行く雲の如くに所定せず、身のはかなさ
に涙を流すことしきりである。』
甕ノ泊・道口、津ともに古くから山陽道と瀬
戸内海航路との接点として開かれた海港と考え
られ、またこの沖合一帯の海を「甕ノ海」と呼
んでいたものと想像される。



富峠付近模式図
H元・12・19
渡辺作図